

## 2サムエル記4-6章 「ダビデ王国の確立」

### アウトライン

#### 1A イシュ・ボシェテの死 4

1B サウル家の残り 1-4

2B 殺人者の処刑 5-12

#### 2A ダビデの即位 5

1B イスラエル全部族による任命 1-5

2B エルサレムの王家 6-16

3B ペリシテ人からの防御 17-25

#### 3A 神の箱の前での賛美 6

1B 牛車からの教訓 1-15

2B 夫婦の軛轢 16-23

### 本文

サムエル記第二4章を開いてください。私たちは前回、サウル家とダビデ家の間に戦いが続いていたところを読みました。それから、アブネルがダビデのところに行き、全イスラエルをユダの王ダビデに移行することを約束しました。ところが、ダビデの家来ヨアブがアブネルを殺しました。自分の肉の兄弟アサエルをアブネルが殺していたからです。そこでダビデはアブネルのために深く悲しみました。それでイスラエルはダビデがアブネルを殺したのではないことを知りました。そして4章に入ります。

#### 1A イシュ・ボシェテの死 4

1B サウル家の残り 1-4

4:1 サウルの子イシュ・ボシェテは、アブネルがヘブロンで死んだことを聞いて、氣力を失った。イスラエル人もみな、うろたえた。

これがイシュ・ボシェテの反応でした。氣力を失いました。そして、イスラエル人もうろたえています。このような脆弱な時を利用して悪い行いをする輩が出てきます。

4:2 サウルの子イシュ・ボシェテのもとに、ふたりの略奪隊の隊長がいた。ひとりの名はバアナ、もうひとりの名はレカブといって、ふたりともベニヤミン族のベエロテ人リモンの子であった。というのは、ベエロテもベニヤミンに属するとみなされていたからである。4:3 ベエロテ人はギタイムに逃げて、寄留者となった。今日もそうである。

ベエロテ人はベニヤミン族の者ですから、サウル家の身内です。この彼らが殺すのですから、なおのこと彼らがすることは悪いことです。

4:4 さて、サウルの子ヨナタンに、足の不自由な息子がひとりいた。その子は、サウルとヨナタンの悲報がイスラエルからもたらされたとき五歳であった。うばがこの子を抱いて逃げるとき、あまり急いで逃げたので、この子を落とし、そのためにこの子は足なえになった。この子の名はメフィボシエテといった。

バアナとレカブがすることを話す前に、メフィボシエテという人物についての紹介を挿入しています。なぜなら、彼はサウル家の子孫だからです。イシュ・ボシエテが死んだ後にサウル家で残っている王族であり、ダビデがその生き残りに恵みを施したいと言います。そして、彼は足なえになりました。ここに書いてあるとおり、うばが彼を落としたため足なえになったのは、サムエル記第一の最後でサウルとヨナタンがペリシテ人と戦って、死んだ知らせが来たときでした。ペリシテ人が自分たちをすぐ殺すだろうと思ったからです。

## 2B 殺人者の処刑 5-12

4:5 ベエロテ人リモンの子のレカブとバアナが、日盛りに、イシュ・ボシエテの家にやって来たが、ちょうどその時、イシュ・ボシエテは昼寝をしていた。

当時はこのように、日が照っている時は昼寝をするのが習慣でした。

4:6 彼らは、小麦を取りに家の中まではいり込み、そこで、彼の下腹を突いて殺した。レカブとその兄弟バアナはのがれた。4:7 彼らが家にはいったとき、イシュ・ボシエテは寝室の寝床で寝ていた。彼らは彼を突き殺して首をはね、その首を持って、一晩中、アラバへの道を歩いた。

アラバとはヨルダン溪谷のことです。マハナウムからヘブロンまでの数十キロを延々と歩き続けました。

4:8 彼らはイシュ・ボシエテの首をヘブロンのダビデのもとに持って来て、王に言った。「ご覧ください。これは、あなたのいのちをねらっていたあなたの敵、サウルの子イシュ・ボシエテの首です。主は、きょう、わが主、王のために、サウルとその子孫に復讐されたのです。」4:9 すると、ダビデは、ベエロテ人リモンの子レカブとその兄弟バアナに答えて言った。「私のいのちをあらゆる苦難から救い出してくださった主は生きておられる。

この二人は、イシュ・ボシエテの殺人によってダビデを喜ばし、手柄を立てたいと思っていました。けれどもそれはダビデの心ではありません。ダビデはその反対の心を持っていました。サウル家の者たちを平和に迎え入れたいと願っていました。

そしてダビデは、「私のいのちをあらゆる苦難から救い出してくださいました。主は生きておられる。」と語っています。この二人は、ダビデをイシュ・ボシェテから救う手助けをしたのだと自負していました。けれどもダビデは、主が自分のいのちをあらゆる苦難から救い出してくださいましたのだ、と語っています。私たちはどうしても、自分の手で救いを得たいと願っています。困難なことがある時に、自分で救いや助けの道を捜して、それを成し遂げようとしてしまいます。けれども、それは主がしてくださるのです。ですから、私たちは自分の手を降ろして、主がしてくださるようにゆだねることが必要です。

4:10 かつて私に、『ご覧ください。サウルは死にました。』と告げて、自分自身では、良い知らせをもたらしたつもりでいた者を、私は捕えて、ツィケラグで殺した。それが、その良い知らせの報いであつた。4:11 まして、この悪者どもが、ひとりの正しい人を、その家の中の、しかも寝床の上で殺したときはなおのこと、今、私は彼の血の責任をおまえたちに問い、この地からおまえたちを除き去らないでおられようか。」

かつてアマレク人が、偽りの報告でしたが、サウル王が死にかけていてそれで殺したと言いましたが、その発言に基づきダビデは彼を処刑しました。けれどもこの二人の場合は、もっと悪質です。戦いの中ではなく家の中で、しかも寝床にまで入って殺しました。

4:12 ダビデが命じたので、若者たちは彼らを殺し、手、足を切り離した。そして、ヘブロンの池のほとりで木につるした。しかし、イシュ・ボシェテの首は、ヘブロンにあるアブネルの墓に持って行き、そこに葬った。

ダビデの処刑の仕方は残酷であります。モーセの律法を反映したものです。彼らが行なった通りにその報いを与えました。首を取って歩いてきたので、同じように体の部分を切り取りました。そして木につるされたものは神に呪われている、という律法の言葉があるのでその通りにしました。一方でイシュ・ボシェテは、その家来アブネルと同じところに丁重に葬りました。

## **2A ダビデの即位 5**

このことによって、ユダ以外のイスラエルには誰も王がいなくなりました。2章 10-11節を読みますと、イシュ・ボシェテは二年間の統治、ダビデはヘブロンで七年六ヶ月の治世だとあります。したがって、5章は約五年後の話になると考えられます。

### **1B イスラエル全部族による任命 1-5**

5:1 イスラエルの全部族は、ヘブロンのダビデのもとに来てこう言った。「ご覧のとおり、私たちはあなたの骨肉です。5:2 これまで、サウルが私たちの王であった時でさえ、イスラエルを動かしていたのは、あなたでした。しかも、主はあなたに言われました。『あなたがわたしの民イスラエルを牧し、あなたがイスラエルの君主となる。』」5:3 イスラエルの全長老がヘブロンの王のもとに来た

とき、ダビデ王は、ヘブロンで主の前に、彼らと契約を結び、彼らはダビデに油をそそいでイスラエルの王とした。

イスラエルとユダというのは、後で分裂してできた名称であり、ユダ族はもちろんイスラエルの一部であります。それで、「**私たちはあなたの骨肉です。**」とっています。

そして大事なのは次の長老たちの発言です。「**これまで、サウルが私たちの王であった時でさえ、イスラエルを動かしていたのは、あなたでした。**」おそらく預言者サムエルの口を通して、ダビデがイスラエルの君主となる、という言葉がイスラエル中にも伝わっていたのでしょう。そして言葉だけではなく、サウルが治めている時も実際に動かしていたのはダビデだったのです。つまり神は働かれていたのに、イスラエルの長老はもう十数年経ってからようやくそのことを認めました。

私たちが、神が既に働かれているのにそれに追いついていないことが多々あります。私たちは逆に、自分たちがしていることに神が遅れを取っている、と感じてしまいます。物事が遅々として進まないと感じてしまうのです。けれども実はその反対で、私たちがまだ神の働きを悟らず、あるいは分かっているにもかかわらずそこに入っていく勇気が出ていない、ということがあります。

5:4 **ダビデは三十歳で王となり、四十年間、王であった。** 5:5 **ヘブロンで七年六か月、ユダを治め、エルサレムで三十三年、全イスラエルとユダを治めた。**

興味深い数字がたくさん並んでいます。まずダビデが三十歳から王になったというのは、かつてヨセフがエジプトの総理大臣になったときもそうでしたが、イエス・キリストが公生涯を始められるときにもおよそ三十歳でした。それから、「**四十年間**」の統治です。モーセの生涯は、四十で分けられました。エジプトでの生活が四十歳まで、荒野での羊飼いの生活が八十歳まで、そして約束の地までが百二十歳までであります。裁きを行なう期間です、それからヘブロンでの統治が七年半ということで、神の完全数「七」が使われています。そして三十三年をエルサレムから治めたのですが、イエス様の公生涯は三十三歳の頃、十字架につけられ、よみがえられたと思われま

## 2B エルサレムの王家 6-16

5:6 **王とその部下がエルサレムに来て、その地の住民エブス人のところに行ったとき、彼らはダビデに言った。「あなたはここに来ることはできない。めしいや足なえでさえ、あなたを追い出せる。」** 彼らは、**ダビデがここに来ることができない、と考えていたからであった。** 5:7 **しかし、ダビデはシオンの要害を攻め取った。これが、ダビデの町である。**

ダビデたちは、エルサレムに来ました。そこは、ユダ族とベニヤミン族の境にある町であり、ユダとイスラエルを統一させるのは適切な地理的位置にあります。そしてここにあるように、そこは自然要害です。東はケデロンの谷が走っています。そして南と西にヒノムの谷が走っています。北だ

けを防御すれば、外敵から守られているところです。それで、エブス人が「めしいや足なえさえ、あなたを追い出せる。」と言いました。

そして何よりもエルサレムは、神が心に留めておられる都です。かつてアブラハムに、サレムの王メルキデゼクが来て、祝福しました。サレムとはエルサレムのことです。そして、アブラハムがイサクをいけにえとして捧げようとしたところは、モリヤの山であり、ダビデの町の北に隣接しているところです。この時以降エルサレムはイスラエルの都となり、ここで私たちの主イエス・キリストが十字架につけられ、よみがえり、教会もここで誕生し、それから新天新地における天のエルサレムに続く、神の都になります。

ヨシュアの時代、ここを取るように命じられていました(ヨシュア 15:63)。けれどもできなかったとあります。また士師の時代にも、ベニヤミンがエブス人を追い払わなかった、とあります(士師 1:21)。ついにダビデの時代にそこを攻略することができました。

5:8 その日ダビデは、「だれでもエブス人を打とうとする者は、水汲みの地下道を抜けて、ダビデが憎む足なえとめしいを打て。」と言った。このため、「めしいや足なえは宮にはいってはならない。」と言われている。5:9 こうしてダビデはこの要害を住まいとして、これをダビデの町と呼んだ。ダビデはミロから内側にかけて、回りに城壁を建てた。

難攻不落に見えたエルサレムですが、「水汲みの地下道」がありました。歴代誌第一によりますと、ヨアブがここをよじ登りました。今、ダビデの町の遺跡に行きますと、「ウォレンの縦抗」と呼ばれるものを見ることができます。そこをよじ登って、エブス人の町に入りました。

5:10 ダビデはますます大いなる者となり、万軍の神、主が彼とともにおられた。5:11 ツロの王ヒラムは、ダビデのもとに使者を送り、杉材、大工、石工を送った。彼らはダビデのために王宮を建てた 5:12 ダビデは、主が彼をイスラエルの王として堅く立て、ご自分の民イスラエルのために、彼の王国を盛んにされたのを知った。

ダビデ王国が盛んになりました。その一つの証拠として、外国の王が反応しています。ツロは今レバノンにありますが、その杉は聖書にも出てくるすぐれたものです。

そしてダビデが知ったことを見てください。「主が」彼をイスラエルの王として立てた、それから、イスラエルは神ご自身の民である、ということです。詩篇 75 篇 6-7 節にこうあります。「高く上げることは、東からでもなく、西からでもなく、荒野からでもない。それは、神が、さばく方であり、これを低くし、かれを高く上げられるからだ。」主が引き上げてくださるのであって、自分が行なうことではありません。主イエスご自身でさえ、神の御子であられるのに父なる神が引き上げるまでは僕の姿を取っておられました。死なれ、葬られ、そしてよみがえられ、それからようやく天に引き上げられ

て神の御座に着かれました。同じように、私たち一人一人が与えられている力や影響力は、主が定められており、主が引き上げる時に引き上げられます。

それから、主に与えられた力は神の民に分かち合うために与えられていることをダビデは知っていました。自分自身が栄えるのは、自分自身のためではなく、むしろイスラエル全体を豊かにさせていくためです。したがって、私たちはいつも御霊の賜物を考える時に、他の兄弟姉妹のこと、教会全体の益になることを考える必要があります。

5:13 ダビデはヘbronから来て後、エルサレムで、さらにそばめたちと妻たちをめとった。ダビデにはさらに、息子、娘たちが生まれた。5:14 エルサレムで彼に生まれた子の名は次のとおり。シヤムア、ショバブ、ナタン、ソロモン、5:15 イブハル、エリシュア、ネフェグ、ヤフィア、5:16 エリシャマ、エルヤダ、エリフェレテであった。

ダビデがさらに妻をめとりました。前回話したように、王国を確かなものにするには、後継者である息子たちが数多くいる必要があります。しかし、これは神の元々の意図から外れた行為です。イエスは、男と女の一对一の結婚が神の定めたものであることを話されました。このような時代に一夫多妻は許容されていましたが、その間にある男女関係が健全に育つことは難しいです。さっそく問題が、今日の学びの最後に出てきます。

### 3B ペリシテ人からの防御 17-25

5:17 ペリシテ人は、ダビデが油をそそがれてイスラエルの王となったことを聞いた。そこでペリシテ人はみな、ダビデをねらって上って来た。ダビデはそれと聞き、要害に下って行った。

王として即位してから、すぐに宿敵ペリシテ人がやって来ました。彼らは士師の時代からイスラエルの悩ましてきた長年の敵であります。そしてイスラエルに王が現れたということで、脅威を感じて攻めてきたのです。私たちが主にあって一歩前進する時は、必ず抵抗があります。主がなされようとしていることに敵対する陣営が、霊的空間にいるからです。

5:18 ペリシテ人は来て、レファイムの谷間に展開した。

レファイムの谷間は、エルサレムの南西にある谷で、その向こうにはゴリヤテとダビデが戦ったエラの谷があります。ですからペリシテ人の地からそのままエルサレムにやって来ました。

5:19 そこで、ダビデは主に伺って言った。「ペリシテ人を攻めに上るべきでしょうか。彼らを私の手に渡してくださるでしょうか。」すると主はダビデに仰せられた。「上れ。わたしは必ず、ペリシテ人をあなたの手に渡すから。」

ここに再び、ダビデが主に伺うというすぐれた霊性を見ます。戦いに来ているのですから応戦するのは当たり前だと思います。けれども、彼はそれでも主に伺ったのです。彼は自分自身を信頼していませんでした。自分の判断や能力が確かなものだと思っていなかったのです。

5:20 それで、ダビデはバアル・ペラツィムに行き、そこで彼らを打った。そして言った。「主は、水が破れ出るように、私の前で私の敵を破られた。」それゆえ彼は、その場所の名をバアル・ペラツィムと呼んだ。

すばらしい主の働きです。「パラツ」という破るという意味の言葉からの派生語が、「ペラツィム」です。ちょうどダムが決壊するように、水が破れ出るように、敵を破られました。同じように主は、硬直した状態を水を破るように破ってください、という御霊の働きを持っています。

5:21 彼らが自分たちの偶像を置き去りにして行ったので、ダビデとその部下はそれらを運んで捨てた。

当時の人々の戦いは、このようにして偶像を持って来て、自分たちの神が相手の神に打ち勝つという信仰を持っていました。けれども負けた時に、偶像を持ち去る時間も無く逃げたので、そこに残されていました。それに奇妙な好奇心を抱くこともなく、持ち運んで捨てたのは賢明でした。

5:22 ところがペリシテ人は、なおもまた上って来て、レファイムの谷間に展開した。5:23 そこで、ダビデが主に伺ったところ、主は仰せられた。「上って行くな。彼らのうしろに回って行き、バルサム樹の林の前から彼らに向かえ。5:24 バルサム樹の林の上から行進の音が聞こえたら、そのとき、あなたは攻め上れ。そのとき、主はすでに、ペリシテ人の陣営を打つために、あなたより先に出ているから。」

なんと執拗に、またレファイムの谷間に展開しました。そこで、「また打ち負かしてやろう。」と思って同じように上っていくことはいとも簡単です。私たちは前例があって、その前例の通り動こうとしてしまいます。特に勝利をしたら、それが勝利の秘訣だと思ってしまうのです。けれども、ダビデは祈りました。そうしたら後ろに回って攻め取れ、という神の命令だったので。

神はいつも、このように人間がご自身のみで頼り頼むように仕向けられます。方法を固定化させて、その方法にしたがって動くようにするのではなく、いろいろな方法を作られます。例えば、神が癒される時に、一定の方法を用いられたのでしょうか？いいえ、イエス様は遠くから言葉を与えられて人を癒されたこともあったし、つばきを土にかけて泥をつくってそれを目に塗って、目を開かせたこともあります。だから、主にいつも聞いて、御霊によって動かなければいけません。

5:25 ダビデは、主が彼に命じたとおりにし、ゲバからゲゼルに至るまでのペリシテ人を打った。

ゲバは、ベニヤミン領のところにあり、ゲゼルはずっとテルアビブに近い北西地域にあります。

### **3A 神の箱の前での賛美 6**

#### **1B 牛車からの教訓 1-15**

6:1 ダビデは再びイスラエルの精鋭三万をことごとく集めた。

ダビデはこれから、神の箱を運ぼうとしています。その行列を守るために、精鋭三万人を集めました。

6:2 ダビデはユダのバアラから神の箱を運び上ろうとして、自分につくすべての民とともに出かけた。神の箱は、ケルビムの上に座しておられる万軍の主の名で呼ばれている。6:3 彼らは、神の箱を、新しい車に載せて、丘の上にあるアビナダブの家から運び出した。アビナダブの子、ウザとアヨフが新しい車を御していた。

非常に興味深いことが起こっています。午前礼拝で学んだように、牛車に神の箱を載せるというのは、ペリシテ人が行なったことです。契約の箱は、レビ人が担がなければいけないものです。今私たちは、ダビデがペリシテ人と戦ったところを読みました。そしてペリシテ人が残した偶像もそれに興味を示すことなく、捨てたところも読みました。このようにペリシテ人とは全く分離しているように見えながら、実はペリシテ人のしている習慣を踏襲していました。

それだけ私たちは、自分たちが主に仕えていると思いながら、主が御言葉によって教えられていることではなくて、これまでのやり方を踏襲してしまう傾向があることを示しています。まさに、このような習慣は嫌悪すると思っても、気づいたらそれを主に仕えるためにまさに使っていることがあるのです。心は正しいのですが、方法が間違っています。

6:4 丘の上にあるアビナダブの家からそれを神の箱とともに運び出したとき、アヨフは箱の前を歩いていた。6:5 ダビデとイスラエルの全家は歌を歌い、立琴、琴、タンバリン、カスタネット、シンバルを鳴らして、主の前で、力の限り喜び踊った。6:6 こうして彼らがナコンの打ち場まで来たとき、ウザは神の箱に手を伸ばして、それを押えた。牛がそれをひっくり返しそうになったからである。6:7 すると、主の怒りがウザに向かって燃え上がり、神は、その不敬の罪のために、彼をその場で打たれたので、彼は神の箱のかたわらのその場で死んだ。6:8 ダビデの心は激した。ウザによる割りこみに主が怒りを発せられたからである。それで、その場所はペレツ・ウザと呼ばれた。今日もそうである。

午前礼拝で学びましたが、知識のない熱心さはよくありません。熱心であることは素晴らしいですが、実際生活に適用している知識を持っていなければ、このように主の怒りを買う、あるいは主の御心と正反対のことをしかねないのです。熱心になればなるほど、御心から遠く離れてしまうこ

とを行なってしまいます。

6:9 その日ダビデは主を恐れて言った。「主の箱を、私のところにお迎えすることはできない。」  
6:10 ダビデは主の箱を彼のところ、ダビデの町に移したくなかったので、ガテ人オベデ・エドムの家にそれを回した。6:11 こうして、主の箱はガテ人オベデ・エドムの家に三か月とどまった。主はオベデ・エドムと彼の全家を祝福された。6:12 主が神の箱のことで、オベデ・エドムの家と彼に属するすべてのものを祝福された、ということがダビデ王に知らされた。そこでダビデは行って、喜びをもって神の箱をオベデ・エドムの家からダビデの町へ運び上った。

ダビデは謙虚でした。主が怒りを発せられたことで、彼は神に対して怒りを発していませんでした。自分のほうに過ちがあったかもしれないと彼は省みて、それで主の方法を見つけ出し、実行したのです。私たちも、ダビデのように衝撃を受ける時があるかもしれません。けれども、それはちょうどよい主にある自省の時間です。そして、主が再び祝福してくださるのを見つめて、そこからスタートすればよいのです。

6:13 主の箱をかつぐ者たちが六歩進んだとき、ダビデは肥えた牛をいけにえとしてささげた。  
6:14 ダビデは、主の前で、力の限り踊った。ダビデは亜麻布のエポデをまとっていた。6:15 ダビデとイスラエルの全家は、歓声をあげ、角笛を鳴らして、主の箱を運び上った。

レビ人が主の箱をかついでいます。さらにいけにえまで捧げています。そして、あの有名なダビデの踊りです。どういう風に踊っていたのか、昔ビデオがなかったので見ることができなくて残念です。けれども、ダビデは人に見せるためではなくて「主の前で」踊りました。大事ですね、賛美の歌もそうですが、それは人に聞かせるものではありません。主に聞かせるものです。私は以前、教会の人にカラオケに行くのを誘われました。私が恥ずかしい、というと、「清正が言う言葉じゃないよ。礼拝賛美の時、声が大きいじゃん。」と言われました。私は、「それは神に歌っているから大きく歌えるのであって、人に対しては恥ずかしい。」と言いました。

そして彼は「力の限り」踊っています。ダビデの主との関係には、感情が多分に含まれていました。彼の詩篇を読めば、それは自ずと分かります。クリスチャンにとって間違った態度が二つあります。一つは、感情に拠り頼んだ神との関係です。いいえ、真理の言葉の支配の中で感情を働かせるのがクリスチャンです。もう一つは、感情から離れた神との関係です。実は自分に感情があるのに、それが無いものであるかのように振舞います。他の事柄や他の人のことについてはたくさん話することができますが、自分自身の信仰の分かち合いや、自分に関することについては隠してしまいます。どちらも間違った姿勢です。

そして、もう一つの彼の踊りの特徴は、他の人と同じ服装をしていたことです。「亜麻布のエポデ」をまとっています。歴代誌第一 15 章 27 節には、行列をなして歩いている他のレビ人たちと同

じ服装でした。彼は主の前では王服を脱ぎ、他の民と同じように踊っていたのです。

これは福音です。キリストにあつて、神の前では全ての人と同じところに立っています。私が、チャック・スミス牧師から次の言葉を聞いた時は、目ん玉が飛びぬけそうになりました。「神にとって私が大切であるのと全く同じように、神にとってあなたはとても重要なのです。」私は、チャック・スミスのような牧師や他の聖職者(?)は、より神に近づいており、私は末席にいる平信徒なのだという気持ちを持っていました。自分はきちんとしたクリスチャンではないからという、引け目を感じていました。けれども、彼から学んだのは、イエス・キリストという方が自分の近くにいる、ということでした。主の前に階級はないのです。ただ主がそれぞれの近くにおられるのです。

## 2B 夫婦の軋轢 16-23

次に、悲しい出来事が起こります。

6:16 主の箱はダビデの町にはいった。サウルの娘ミカルは窓から見おろし、ダビデ王が主の前ではねたり踊ったりしているのを見て、心の中で彼をさげすんだ。

ミカルは、ダビデに与えられた初めの妻です。サウルが、ペリシテ人の陽の皮百枚をもってミカエルを与えると約束し、二百枚をもって帰ってきて得た妻です。けれどもサウルがダビデを追跡してからしばらくして、サウルは娘ミカルを他の男に与えてしまいました。けれども、ダビデのところに將軍アブネルが来て、イスラエルをあなたに渡すと彼がダビデに行った時に、ダビデはミカルを自分に返してもらうことを条件にして、ミカルがダビデのところに戻って来たのです。その彼女が今、ダビデの踊っているのを見て、心の中でさげすんでいます。

6:17 こうして彼らは、主の箱を運び込み、ダビデがそのために張った天幕の真中の場所に安置した。それから、ダビデは主の前に、全焼のいけにえと和解のいけにえをささげた。

これは、かなり開かれた礼拝です。主の箱がそのまま天幕の中にあります。幕屋にあったような、垂れ幕などの仕切りがありません。そして祭壇は石を積み上げるなどして作ったのでしょう、それでいけにえを捧げました。ダビデの礼拝には、そのまま神の御前に行くというオープンさがあり、驚くべきことです。

6:18 ダビデは、全焼のいけにえと和解のいけにえをささげ終えてから、万軍の主の御名によって民を祝福した。6:19 そして民全部、イスラエルの群集全部に、男にも女にも、それぞれ、輪型のパン一個、なつめやしの菓子一個、干しぶどうの菓子一個を分け与えた。こうして民はみな、それぞれ自分の家に帰った。

これはダビデの、霊的には最上の至福の一時であったことでしょう。サウルから彼が逃げていた

時、彼は、「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。」と歌った時に、その魂の飢え渴きはこういうものでした。「私はあの事などを思い起こし、御前に私の心を注ぎ出しています。私がああ群れといっしょに行き巡り、喜びと感謝の声をあげて、祭りを祝う群衆とともに神の家へとゆっくり歩いて行ったことなどを。(詩篇 42:4)」神の民と共に、喜びと感謝の声を上げて、ともにゆっくり行進して行った時、その祭りを思って、生ける神を慕いあえていたのです。そして今、このことをまた行うことのできた、人生最高の時間であります。

6:20 ダビデが自分の家族を祝福するために戻ると、サウルの娘ミカルがダビデを迎えに出て来て言った。「イスラエルの王は、きょう、ほんとうに威厳がございましたね。ごろつきが恥ずかしげもなく裸になるように、きょう、あなたは自分の家来のはしための目の前で裸におなりになって。」

これは決して言うてはいけない言葉でした。妻であっても夫に言うてはいけない言葉があります。夫と妻の関係は、妻は夫に従い、夫は妻を自分のように愛するというものです。男に必要なのは、神にあって自分が生きているその土台を助け支えてくれる存在です。それが女です。男が持っている職分を妻が見下す時に、男は深く傷つきます。

6:21 ダビデはミカルに言った。「あなたの父よりも、その全家よりも、むしろ私を選んで主の民イスラエルの君主に任じられた主の前なのだ。私はその主の前で喜び踊るのだ。6:22 私はこれよりもっと卑しめられよう。あなたの目に卑しく見えても、あなたの言うそのはしためたちに、敬われたいのだ。」

ダビデの言っている内容は正しいです。サウルの娘ミカルは、主に対する情熱がなかったか、あるいは薄かったと考えられます。世的な目で、ダビデの姿を見ていました。人の前ではなく、主の前で喜び踊ること。そして、もっと世の目からは卑しめられること。しかし、それが真に靈的な尊敬を得ることができることなのだ、ということです。

私たちはいろいろな世的な視点を持っています。それで判断していることが意外に多いです。例えばパウロはテモテに対して、「年が若いからといって、だれにも軽く見られないようにしなさい。(1テモテ 4:12)」と言いました。なぜなら、年が若いことで軽く見られていたのです。これはちょうど、病院に行ったら若いお医者さんで、その診断に対して気に食わないと、「あなたは若いね。」と言っているようなものです。私が以前聞いた話では、ある若者が、牧師が三位一体について何か変なことを言っていたので、それを確かめに行きました。すると、「君は若いから、そんな考えるんだよ。」と牧師は言ったそうです！こういう視点を私たちはいつの間にかしています。たとえ卑しく見えたとしても、そこにある靈的価値や素質を見る人は真の意味で靈的な大人です。

しかし、ダビデは言う必要のない言葉を言っています。「あなたの父よりも、その全家よりも、むしろ私を選んで主の民イスラエルの君主に任じられた主の前なのだ。」これは言う必要はありません。

言葉というのは剣になります。「私たちはみな、多くの点で失敗をするものです。もし、ことばで失敗をしない人がいたら、その人は、からだ全体もりっぱに制御できる完全な人です。(ヤコブ 3:2)」ミカルがダビデを酷く傷つけたので、自分も傷つけ返しました。そして、傷つけられるとその心は本当に堅くなり、いつまでも抵抗するようになります。「反抗する兄弟は堅固な城よりも近寄りにくい。敵意は宮殿のかんぬきのようなだ。(箴言 18:19)」私たちが一度反抗心や敵意を持つと、堅固な城よりも近寄りにくく、宮殿のかんぬきのようにになります。

#### 6:23 サウルの娘ミカルには死ぬまで子どもがなかった。

これはどういうことか？簡単です、ダビデがミカルのところに入らなかったということです。ダビデには他にも多くの妻がいるのですから、彼女を無視したとしてもどうってことはありません。けれどもここに、冷えきってしまった夫婦関係を見えています。

ここが、ダビデが以前ヨナタンの死を悲しんだ時に、「あなたは私を大いに喜ばせ、あなたの私への愛は、女の愛にもまさって、すばらしかった。(2サムエル 1:26)」と言っていることの背景です。女の愛というのは、恋愛のことであります。ダビデはミカルとの愛で失敗し、ヨナタンの持っている友愛のほうがはるかに優っていました。

どうしてミカルがこうなってしまったか、考えてみましょう。彼女は、ダビデが好きになりました。その時のダビデは、まだ若々しいエネルギッシュな青年です。ところが父サウルによって、他の男のところへ嫁ぎました。おそらく二十年ぐらいは経っていたことでしょう。ですから夫婦生活も長くなり、落ち着いていたのに、突如としてダビデのところへ連れていかれました。

そしてかつて恋人同士であった二人は、その二十年ぐらいの間に大きく変わっていました。ダビデのその若々しさはもちろなくなり、もっと洗練されて落ち着いている姿になっています。そしてミカルは、ダビデのただ一人の妻ではありませんでした。数多くの妻の一人です。ダビデが彼女に費やしている時間は当然少なくなっています。このことが積み重なって、ミカルに溜まっていた苦みがダビデを切るような言葉になったのだと思われます。

そしてダビデとミカルに、霊的な求め方に大きな違いがあります。ミカルは神のことについて、さほど興味がなかったのでしょう。ダビデはこよなく神を愛していました。かつてミカルが愛した、感情に満ちた同じダビデが、ただ神だけにその感情が向けられているのも妬ましくなったのかもしれませんが。

いずれにしても、夫婦関係は大きなテーマです。ダビデには打算がありました。イスラエルの王となるために多くの妻を持ちました。モーセは、イスラエルの王は「多くの妻を持つてはならない。」と戒めていました(申命記 17:17)。私はこの箇所はソロモンに当てはまると思っています。なぜな

ら、その後で、心がそれていくから、とあるからです。ダビデは終生、主に心が向けられていました。けれども、結婚に対する神の初めの意図は、男女一対一の関係です。確かに王国の確立には必要だったのかも知れませんが、そのためにダビデは自分の家の中で妻との関係のみならず、息子との関係でも悩み苦しみます。ミカルについても、すでに夫まで与えられ長いこと経っていたのだから、無理をしてひっぱってくる必要はなかったでしょう。

けれども、解決あるいは救いの道はあります。聖書の命令があり、それがもちろん、「妻がキリストに従うように夫に従い、夫は自分の体のように妻を愛する。」ということです。そして大事なのが悔い改めです。その悔い改めとは、相手に対してするものではありません。主の前に静まって、主に対して行うものです。イエス様は、離婚について「あなたがたの心がかたくななので」と言われました。固くなってしまった心を柔らかかにしていただくのは、主のみです。

もちろん夫婦関係のみならず、あらゆる人間関係が当てはまるでしょう。言葉のやり取りについてのこと、心を変えていただくことについても同じ原則になることでしょう。